

## 労山山岳事故対策基金と山岳遭難

井上 正敏

労山山岳事故対策基金にどの程度の口数に加入したらいいのか、山岳遭難事故の実績から捜索救助費用について考察してみました。

以下の内容は、小冊子の「山歩みち (Vol028 2018Spring) の P22~23」から出典したものです。

ひとたび遭難となれば、たとえ怪我がなくても、自力下山ができたとしても、そこには費用が発生することはあまり知られていません。

山岳遭難における捜索費用は、遭難者本人やその家族の負担になることは、一般的に知られています。しかし、その金額、請求元、そして費用項目となると、具体的に答えられる人は少なくなるだろう。なぜなら、公的な統計もなく、いわゆる山岳保険等でも公表されていないからだ。

ところで、山岳遭難対策制度を会員組織で運営する日本山岳救助機構(jRO:ジロ-)という会社がある。同機構は、会員が山岳遭難に遭遇して捜索救助費用を負担した場合、330万円を限度に支払っているが、この費用は会員全員が分担し合う事後分担金制度を設けている。

jROでは、公平かつ高い透明度で会員負担をいただくために「何時、どこで、どのような遭難が起きたのか。捜索救助費用はいくらかかったのか」について個人情報を除いて開示している。

今回、jROの協力により、その情報の一部を誌面に公開していただいた。ここでは、その情報をもとに、遭難事例を具体的に検証してみよう。

表1 jRO捜索救助費用補てん金支払実績抜粋

遭難発生月と山名	遭難概要	補償費用	下山後の身体被害状況
5月 北アルプス北穂高岳	ホワイトアウトで道を失い、救助要請。遭対救助隊が出動し、付添下山。	20万 9153円	特になし
6月 大雪山系旭岳	2パーティで下山中、はぐれて別々に。2名それぞれから救助要請。1名は警察の指示で自力下山、1名はヘリでピックアップ。	33万 6768円	特になし
7月 富士山	八合目付近でめまい、本八合目で極度の下痢。翌日まで休息をとったが歩行不能となり、五合目までブルドーザーで搬送。その後救急車で病院へ。	4万円	特になし
7月 北アルプス燕岳	燕山荘到着後、気分がわるくなり行動不能。県警ヘリにより、最寄り医療機関へ収容される。	8万 175円	入院
8月 北アルプス大天井岳	単独で大天井ヒュッテに向かう途中、道を失う。夜間になり救助要請。ヒュッテから救助隊が出動、その日のうちに小屋に戻る。	8万 6196円	特になし
8月 富士山	下山中、意識消失により転倒。クローラーと救急車を乗り継ぎ、医療機関に搬送。急性肝不全。高度脱水症と診断。	4万円	病院収容
9月 苗場山周辺鳥甲山	下山中に転倒するも行動。深夜12時に電灯の電池が切れ、登山口から200mほどの地点でビバーク。家族より救助要請。翌日自力下山。	6万 500円	特になし
10月 志賀高原周辺高社山	高社山頂上から木島平スキー場へ下山の際、下山地点より標高100mほど上で日没。その先の歩行に不安を感じ、救助要請。	28万 2240円	特になし
11月 越後駒ヶ岳	5名パーティで登山の後、無事下山。離れた駐車場に駐車していたため、管理人が遭難と判断し救助要請。	13万 9917円	特になし
12月 南アルプス千丈岳	単独で登頂後、降雪とガスで道迷い。自宅家族から救助要請。その日はビバーク、翌日自力下山中に早朝出動した救助隊と遭遇。一緒に下山。	131万 7799円	特になし

ひとことで山岳遭難といっても、雪崩や滑落、脱水症状や急な発病における病気遭難、あるいは道迷いによる遭難まで様々な原因がある。また、その結果として、死亡や負傷、長期にわたる入院加療、そして行方不明まで、これもまた多種あるが、意外な盲点になっているのが、遭難の結果として自力下山、つまり元気に無事帰宅できたなどの、いわば、“ラッキー”なケースである。

一般に遭難とは、警察等に救助要請があった場合の事例を指す。救助要請があれば、その先救助活動が始まるが、それは同時に費用が生まれることも意味する。先ほどの例のように、結果的に無事下山できたとしても、もちろん例外ではない。不幸中の幸いといえるそうしたケースについて、過去10年間の補填金支払実績を抜粋して表1にまとめてみた。

まず注目していただきたい点は、補償費用の項目だ。搜索救助費用は、4万円から131万円までと多岐にわたっているが、概観すれば、20万円から40万円前後の負担が生じていることがみてとれるだろう。

この数字について、みなさんはどう感じるだろうか。

「あ、意外に安いな」、あるいは「無事自力下山できて、そんなにも請求されるのか」だろうか。どう感じたとしても、この金額は事実であるということを、まずは認識してほしい。

次は、請求元についてである。ほとんどの場合、各山麓地に設置されている山岳遭難対策協議会救助隊（遭対救助隊）となっている。

同組織は民間組織であり、その構成員は、地元の山岳ガイド、山小屋従業員、林業や農業従事者の方々である。ひとたび警察や家族から救助要請があれば、急な召集で本業を休み、危険な現場に赴き、暑さ寒さに耐えての搜索救助活動を行っているのが現状だ。

では、搜索救助活動における費用項目は具体的になんだろうか。地方によって異なる点はあるものの、概ね以下の項目と考えてよいだろう。

【隊員手当】1人1日当たり3～5万円(季節・危険度による) × 搜索救助日数

【各種手当】夜間、指揮者等

【保 険】 1週間で1.7万円程度

【宿泊費】 山小屋の場合、1泊あたり1万円程度

【交通費】 現場までの車両費、ガソリン代、ロープウェイ代、民間ヘリ代

【装備費】 ロープ、シュラフ、シート、カラビナ、担架、電池等

【食料費】 昼食や非常食等

【事務費】 隊を組織・運営するための事務管理費等

一般的に表1の補償費用の10%程度

これらの項目や金額は搜索救助活動には必須であり、個別にみても決して高額ではない。しかし、活動にかかわる日数や動員された隊員数、出動回数を足していけば、自ずと高額になっていくのは容易に想像できるだろう。

結果とて、自力下山できたり身体的なダメージがない場合やあるいは関係者による早手回しの救助要請などで発生した搜索救助費用の負担は、その金額にかかわらず、正直

辛いと感じるのは一般的な心情だろう。しかし、こうした場合の補てん（支払い）をもし受けられるのであれば、心情的にも経済的にもダメージを軽減することはできる。

遭難は、自分だけは例外はありえない。また捜索救助活動には必ず費用がかかる。入山時の備えとして、登山届とスマホ（携帯電話）に加え、山岳遭難対策制度の加入は、家族のためにも必要だといえよう。

以上が「山歩みち (Vol028)」から出典した内容ですが、次に労山山岳事故対策基金に当てはめて考察してみます。

以下の内容は、私個人の考えで考察したもので、人それぞれ考え方・捉え方が違うと思います。例えば、山行形態（ハイキングとか本格的な登山）・保険制度に対する考え方・経済的なこと・家族のことなど、その人の置かれた状況で色々違うかと思います。

労山山岳事故対策基金の交付金は、

- ・ **救助、捜索交付**
- ・ 死亡交付
- ・ 傷害交付

の3つについて交付が規定されていますが、ここでは救助・捜索交付について考えてみます。

#### 寄付金と交付（日本勤労者山岳連盟ホームページより出典）

寄付金 登録申込	個人 1口 1,000円 1口以上、10口まで任意加入できます。 団体 1口 2,000円 5口まで任意加入できます。
登録期間	1年間（新規の場合は期限月まで）
交付	<p>[ 個人加入の場合 ]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 死亡・傷害に寄付金登録申込額の 200 倍まで交付</li> <li>■ 救助・捜索に寄付金登録申込額の 300 倍まで交付(加入初年度)</li> </ul> <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 0 10px;"> <p>加入 2 年目から、継続 1 年ごとに 10 倍が加算され、<b>最高 400 倍</b>まで交付されます。</p> <p>但し、ココヘリに加入した場合は、1000 倍とする。</p> </div> <p>※算出方法  <b>救助・捜索交付金限度額=寄付金登録申込額 × ( 300 + (加入年数 - 1) × 10 )</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 入院→事故発生日より 1 年以内の 3 日～210 日を対象とし、入院実数日で交付されます。</li> <li>■ 通院→事故発生日より 1 年以内の 3 日～50 日を対象とし、通院実数日で交付されます。</li> </ul> <p>[ 団体加入の場合 ]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 死亡・傷害については、適用されません。</li> <li>■ 救助・捜索に寄付金登録申込額の 300 倍まで交付(加入初年度)</li> </ul>
新規の申込金	寄付金制度なので加入金は必要ありません（無料です）。

救助・捜索交付金の計算式は、上記表から

救助・捜索交付金＝寄付金登録申込額×[300+(加入年数-1)×10]  
となります。

なお、交付されるのは以下の条件を満たした場合のみです。

- ・所属会に山行届の事前提出（F a x ・ Eメールでも可）
- ・事故発生から30日以内に、日本勤労者山岳連盟（基金運営委員会）に事故一報を提出する。
- ・標高5,000m超えの海外登山は、登録から1年以上経過していること。

それでは、救助・捜索交付金についてシミュレーションしてみます。

[ケース1] 1口を加入 初年度の場合

交付金＝(1口×1000円)×[300+(1-1)×10]＝30万円

※1口1年間加入(加入2年目)；31万円

※1口3年間加入(加入4年目)；33万円

※1口5年間加入(加入6年目)；35万円

[ケース2] 2口を1年間加入(加入2年目)していた場合 ★★

交付金＝(2口×1000円)×[300+(2-1)×10]＝62万円

※2口3年間加入(加入4年目)；66万円

※2口5年間加入(加入6年目)；70万円

※2口10年間加入(加入11年目)；80万円(頭打ち)

但し、倍率が400倍に到達するので、補償限度額目一杯になります。

11年以降も80万円になります。

[ケース3] 3口を1年間加入(加入2年目)していた場合 ★★★

交付金＝(3口×1000円)×[300+(2-1)×10]＝93万円

※3口3年間加入(加入4年目)；99万円

※3口5年間加入(加入6年目)；105万円

※3口10年間加入(加入11年目)；120万円(頭打ち)

但し、倍率が400倍に到達するので、補償限度額目一杯になります。

11年以降も120万円になります。

[ケース4] 4口を1年間加入(加入2年目)していた場合

交付金＝(4口×1000円)×[300+(2-1)×10]＝124万円

※4口3年間加入(加入4年目)；132万円

※4口5年間加入(加入6年目)；140万円

※4口10年間加入(加入11年目)；160万円(頭打ち)

但し、倍率が400倍に到達するので、補償限度額目一杯になります。  
11年以降も160万円になります。

[ケース5] 5口を1年間加入(加入2年目)していた場合 ★

交付金 = (5口 × 1000円) × [300 + (2-1) × 10] = 155万円

※5口3年間加入(加入4年目) ; 165万円

※5口5年間加入(加入6年目) ; 175万円

※5口10年間加入(加入11年目) ; 200万円(頭打ち)

但し、倍率が400倍に到達するので、補償限度額目一杯になります。  
11年以降も200万円になります。

さて、この結果を貴方はどのように考えるでしょうか？ 異論はあるかと思いますが、表1のように遭難時に20万円から100万円以上の負担が発生していることから言えば、私個人的には2~3口が適当かと思いますが、**貴方は何口がいいと思われませんか？**

また、労山山岳事故対策基金は、救助・捜索交付金以外に死亡交付・障害交付もあり、魅力的だと思います。

ちなみに、日本勤労者山岳連盟(基金運営委員会)では、

- ハイキング・軽登山の山行形態に3口
- 雪・岩・沢で5口以上
- 冬季登攀・海外登山などには10口(最大)

を呼びかけています。

月例山行とかひまわり倶楽部山行でみんなと一緒に登っている、一人で登っても精々九重あたりまでなので遭難はしないし安全と思っている **あなた！ 病気遭難**という落とし穴があるのをお忘れではないですか？ 山中で急に具合が悪くなり動けなくなった場合、110番または119番するしかないですね。

特に我が佐賀労山は高齢の方が多いので要注意です。労山山岳事故対策基金に加入していない人は、是非、加入しましょう。

九州では北アルプスなどと違ってヘリによる救助はないと思っている人がおられるかもしれませんが、私は最近3~4年間でヘリによる救助に3回遭遇しました。場所は、雲仙普賢岳直下の紅葉茶屋と、九重の大船山6合目付近及び沓掛山で遭遇しました。

それから、ハイキングではなく本格的な登山(数日間連続しての縦走・冬山・ロッククライミング等)をする人は、ケース4の同じ年会費4000円を払うなら300万円程度の補償がある、労山以外の山岳遭難対策制度が魅力的だと私は思います。

ちなみに私は、労山山岳事故対策基金には加入しておらず、年会費4000円のレスキュー費用保険(300万円補償)に加入しています。

## 自分でできる3つの遭難対策

### 1 登山計画を作り、登山届を出す

登山計画というのは、どの山にどのようなルートで登るか、何時にどこを通過する予定か(日程)、緊急時の避難ルートをどうするか、メンバーリスト、持参装備と食料のリスト、以上をあらかじめ検討して決めます。

そして、1～2枚の文書にまとめて記載した「登山計画書」を作ります。

登山に出掛ける時、そのコピーを1枚余分に用意して、登山口の登山届箱に投函すれば登山届は完了です。

### 2 山岳保険に入る

万一遭難した場合、数10万円から100万円以上の費用が発生することがあります。遭難時に必要な捜索・救助費用が補償される保険または保証制度に、是非とも入っておきましょう。

### 3 通信手段の確保

遭難時には、携帯電話(スマートフォン)などの通信手段が命綱になります。携帯電話がいつでも問題なく使えるように温度管理をし、電源をキープしておきます。

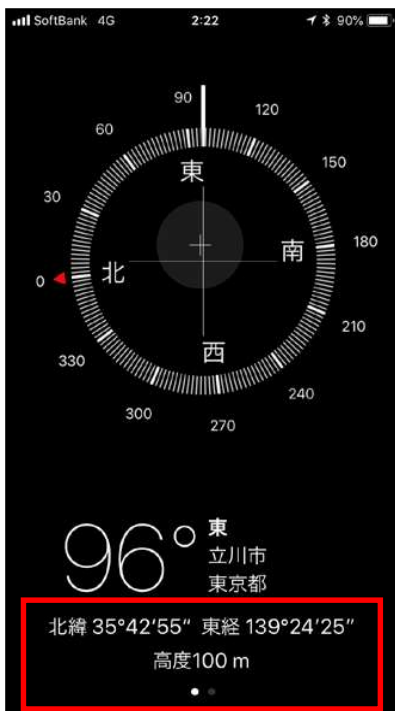
また、GPSの位置情報(緯度・経度)を送信するやり方を調べてマスターしておきましょう。

予備の電池(モバイルバッテリー等)も持って行きましょう。

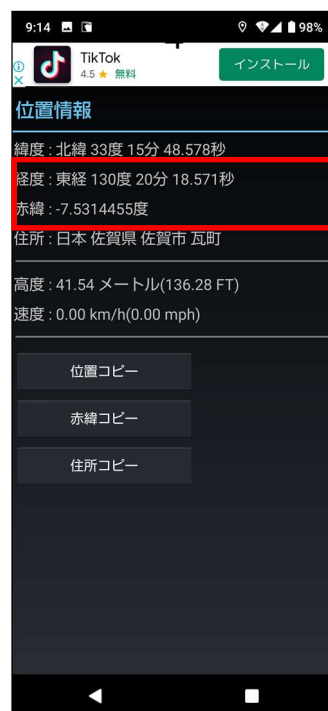
さんぽ  
山歩みち (Vol028) より出典

## [スマホでの緯度・経度の調べ方]

詳細は、ホームページの「お役立ち情報」を閲覧して下さい。



i P h o n e 携 帯



A n d r o i d 携 帯